

# ずいひつ

Z U I H I T U



## 春からの縁起を秋にも!?

札幌市水道事業管理者  
三井 一敏

平成最後の年の始まりに長く待ち焦がれた瞬間が訪れた。その渴望していた至高の出来事とは母校M大ラグビー部の復活・20年ぶりの大学選手権制覇である。

私の出身は北海道北部の小さな市。そんな田舎者が「花の都東京」に憧れて上京し、都会でさまざまな未知なる刺激や経験を与えてもらったが、中でも一番の収穫はラグビーとの出会いといえる。

初めての生観戦は宿敵W大との伝統の定期戦。「この試合は学園祭みたいものだからルールなんて知らなくても楽しめるよ」と半ば無理に連れてこられたのである。ところが…。(旧)国立競技場に轟く地鳴りのような6万人の大歓声。その中で母校の勝利のために激しく身体をぶつけ合う選手たち。この高揚感はいったい何だ!? 私は魂を揺さぶられグイグイと引き込ま

れていった。

この時から40年間以上私のラグビー熱は上がったまままだ。その魅力をなかなか簡単には言い尽くせないが、かつてフランスの名プレイヤーがこう言い表している。「ラグビーは少年をいち早く大人にし、大人にいつまでも少年の心を抱かせる」。これはプレイヤー目線からのものではあるが、観る側にしても屈強で無邪気な男たちが規律を守りながら野蛮に暴れる様に男としての本能を掻き立てられ、プレイヤーに憧憬を抱かざるを得ないのである。

時代は令和に変わりその記念すべき年にラグビーW杯が初めて日本で開催される。ここ札幌でも2試合が予定されている。前大会のように日本代表には世界を驚かすような活躍を期待したいところだ。そしてそれを契機に今度こそラグビー文化がわが国にも根付いてくれることを一ファンとして願わずにはいられない。



## 就任から1年を迎えて

神戸市水道事業管理者  
広瀬 朋義

私は、昨年4月に水道事業管理者に就任し、就任から1年が経過しましたが、昨年を振り返りますと6月の大阪府北部地震や7月の広島県や岡山県での豪雨被害をはじめ相次ぐ台風の上陸など例年にも増して自然災害が多く発生した年でありました。

24年前の阪神・淡路大震災で全国の水道事業者から支援をいただいた神戸市水道局といたしましては、これまで東日本大震災や熊本地震等他都市への支援活動を積極的に行ってまいりましたが、昨年も大阪府箕面市や岡山県倉敷市などに職員と給水タンク車を派遣し応急給水活動等の支援を実施いたしました。

また、昨年は水道法改正により、水道事業に注目が集まった年でもありました。

当局では、当市の人口が減少傾向へと転換し、今後、

水需要や給水収益の減少傾向が強まる一方で、水道管の更新需要の増大や災害対策の充実に対応していかなければなりません。このことから、今後の神戸市水道の目指すべき方向性を示した「神戸水道ビジョン2025」を策定し、諸課題への取組みを進めているところです。

このうち水道管路に係る主な取組みとしましては、基幹的な送水系統の多重化を目的とした市街地送水施設の整備、高度経済成長期に布設した配水管について更新ペースの引き上げ、配水管のダウンサイジング及び配水管網の再構築等を掲げており、これらの事業を並行して計画的に進めてまいります。

これらの事業を限られた財源で効率的に取り組むに当たっては水道事業者だけでなく、メーカーや工事業者の協力が不可欠であると考えております。皆さまのより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

# ずいひつ

Z U I H I T U



## 事業開始 1 年を振り返って

香川県広域水道企業団  
副企業長

高木 孝征

当企業団は昨年4月、全国初の県内一水道として事業を開始しました。ミッションである「香川県水道広域化基本計画」の具体化に向けて、まずは円滑にスタートとできたと思っております。これもひとえに、地域の関係者はもとより、厚生労働省、総務省、(独)水資源機構など多くの方のお力添えの賜物であり、感謝申し上げます。

1年余が経過する中、17構成団体の首長、議会議員からなる運営協議会、企業団議会の開催を通じて、地域を挙げて広域化に取り組んできたことを体感し、当企業団に寄せられる期待の大きさを改めて実感しました。気持ちを引き締めました。また、住民の安全安心の確保は首長の最大の責務であり、水道はそのど真ん中に位置する事業として市町が長年担ってきたこと

を肝に銘じて、市町との連携を心がけてまいりました。

よく「17も集まると大変なのでは…」と聞かれます。日常業務の細かな手順などで違いがあるにしても、組織風土が異なるということではありません。等しく公の仕事、水道事業に携わり、畢竟、使命感や志は共有できています。仲間意識や一体感の醸成は課題ではありますが、そう難しいものではないと思っています。むしろ、多様な人材が集まり、組織のポテンシャルが高まったとポジティブに受け止めています。広域化の先駆けとして誇りを持って取り組むよう、職員には機会を捉えて促しています。

水道事業は未来永劫です。現行の計画は一つの区切りであり、あくまで次への橋渡しと考えています。令和を生きる次の世代のために何をすべきか、という観点を忘れることなく、ミッション遂行に邁進してまいります。皆さまの一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。



## ワンウォーター

(公社)全国上下水道コンサル  
タナント協会会長

村上 雅亮

水は地球上で最も貴重な資源であり、私たちの生活や活動はすべて水の存在に支えられています。しかし、21世紀に入り気候変動の影響が深刻化し、干ばつや洪水が頻発しています。その一方で、水インフラ施設の老朽化が進み、財政事情は厳しさを増しています。これに対し米国を中心に提唱されているのが、ワンウォーターというアプローチです。その理念は、上水も下水も雨水も全ての水は価値ある資源だと考える、経済・環境・社会の利益に目を向ける、水循環を包含する大きなシステムを考える、流域単位で考え行動する、全ての関係者の連携と参画を促すなどです。水道、下水道、雨水対策と個別に対応するのではなく、ワンウォーターの理念を共有し地域全体で取り組もうとするものです。ロサンゼルス市では、下水道局と水道電

力局が中心となり、14の市部局と6つの地方行政機関が参加する委員会が組成され、洪水対策、都市緑化、地下水涵養、再生水利用などが一体的に取り組まれています。

わが国では昨年水道法が改正され、法の目的として「水道の基盤強化」が明記されました。水道事業の持続と強靱化が大きな課題です。課題解決のためには、「水」について幅広い共感を得ること、私たちの暮らしを守ることは「水インフラを守ること」との認識を広めることが重要になります。地域の生活や環境を支える「水」について認識を深め、まちづくりと一体となって水インフラの価値を高めていく必要があります。

人口減少の中、施設の老朽化が進行しており、広域連携や官民連携、あるいは市民や企業との連携が必須になっています。この連携を支えるのも「水」に対する危機感の共有ではないかと考えます。